

現代を表現するキーワードの一つに、情報化社会というのがある。多種多量の情報を瞬時に広域に伝播する技術は、良くも悪くも人間社会に大変革を起こしている。このような情報環境の変化は、肢体不自由者に恩恵をもたらしているのか、それとも新たな情報弱者をつくる危険を含んでいるのか。一方、情報障害者である視覚・聴覚障害者の生活は技術の進歩によって改善されているのか。

■ 障害者のための情報ネットワークを構築し、必要な情報を交流させる

阪神大震災の折、パソコン通信で「肢体不自由養護学校で紙おむつが足りない」と発信されると、翌日には紙おむつが全国から神戸に送られたという⁹⁾。一方、日頃、音声合成装置つきパソコンで新聞を「聞いていた」視覚障害者は、停電によってパソコンはただの箱になり、電話も使えない不自由を味わったという。このような利点と欠点を内包しつつ障害者のための情報ネットワーク構築の動きが活発であり、情報へのアクセシビリティ確保に必要な事例が検討されている。(蘭部英夫氏、7頁)

■ リハ・スタッフは障害者と高度情報システムをつなぐ架け橋に

最近話題になっているインターネット上では、障害者のための情報が提供されている。特に人気が高いのは、静止画像、動画、音声などのマルチメディアを提供できる掲示板である。ここでは文字だけでなく福祉機器を操作する様子が映像と音声付で解説されている。今後、障害者を情報弱者とさせないためには、リハ・スタッフがインターネットなど高度情報システムの扱いに習熟して障害者との架け橋となるべきである。(関根千佳氏、12頁)

■ 重度障害者が情報ネットワークを使いこなすのに必要な支援とは

移動能力や会話能力に障害がある重度障害者にとって、情報通信ネットワークは自立生活や社会参加にかかせない手段になりつつある。しかし機器を用意し、機器を操作できる環境を整え、パソコンの操作方法を覚え、さらに情報ネットワークへ参加するなどのことは容易ではない。6名の四肢麻痺者が参加したモデル実験により、これらの人々にどのような支援が必要か明らかにされた。(伊藤英一氏、17頁)

■ 視覚障害者の情報アクセス環境を改善させる技術の進歩とは

近年のコンピューター技術の進歩は、視覚障害者の情報アクセス環境を改善させている。たとえばパソコンの表示文字を拡大・音声化することで、パソコン通信のデータベース利用や、ワープロを用いて漢字仮名混じり文章の作成が可能になっている。パソコンは、図書点訳や点字プリンタによる図書作成にも利用され、点字図書へのアクセスが容易になっている。その他にも、視覚障害者向けテレビ番組放映、ファックス情報提供などのサービスが実用化され、さらに将来は読書器などの開発が期待されている。(立花明彦氏、22頁)

■ 聴覚障害者の日常生活の不自由さを軽減させる機器開発について

聴覚障害者の日常生活には、相変わらず不自由が多い。しかし視覚障害者と同様、技術の進歩は聴覚障害者の情報環境を改善させてもいる。たとえばパソコン通信上では、聴覚障害者は障害を意識せずに多くの人と意見交換ができる。さらに日常生活上の情報授受を保証する機器として、無線呼び出し器、見えるラジオ、文字放送デコーダ、手書き文字無線通信機、筆談通信機、筆記通訳支援システムなどが開発されている。(畠山卓朗氏、27頁)